

日出城鬼門櫓と県内城郭建築遺構

三ツ股 正明

はじめに

二年半前、新聞紙上に相次いで以下の見出しの記事が掲載された。

○鬼門櫓（日出町）崩壊の危機¹

○日出藩の御茶屋「襟江亭」取り壊し²

いずれも日出町内に現存する建築遺構の記事である。そして今まさに両者とも崩壊寸前といった危機に瀕しているわけであるが、果たしてこうした現状を一体何人の県民が知っているであろうか。

今回大分県地方史研究会において、文化財全般の保存に向けた警鐘を鳴らし、保護に向けた取組を促す主旨の特集を設け、この主旨に応じた原稿を募集するということであるので、これを機に多くの県民、特に当該自治体の首長や文化財担当者に改めてこの危機的状况を訴え、少しでも関心を抱き、早急な保存整備が実現することを願いつつ、鬼門櫓や襟江亭とともに県内に現存する城郭建築遺構を取り上げ、それらの現況や保存整備に向けた私見を述べてみたいと思う。

一 鬼門櫓と襟江亭

紙数の制約もあり、両者の詳細な解説については各種専門書等に任せ、本稿では割愛させていただくが、まずは簡単な説明

と現況について触れていくこととする。

第一に鬼門櫓であるが、これは現在日出小学校が立地する旧日出城本丸内に存在した櫓の一つである。日出城は豊臣秀吉の正室北政所の実兄木下家定の子延俊により関ヶ原戦の翌年築城され、その際義兄である細川忠興が縄張等の援助を行ったと伝えらる。

鬼門櫓の名称が示すように本丸の鬼門の方向（東北）に位置し、江戸時代に作成された「正保城絵図」でもその存在が確認される。これをただの櫓建築と思うなかれ。「名は体を表す」という言葉があるようにこの櫓は単に鬼門の方向に存在するだけではない。櫓自身も鬼門の隅角部を意図的に欠いた五角形平面を有する構造となっているのである。さらにこの櫓を本稿で取り上げた最大かつ重要な理由は「鬼門櫓の名称を持ち、その名称を体現した構造を有する日本全国で唯一現存する櫓建築遺構」という面にある。そればかりかこの特殊な名称と構造はもはや城郭史や建築史の範疇に留まらず、当時の信仰や慣習などを考える上で非情に重要な要素を含んでいることも見逃せない。

櫓は明治維新による廃城後も解体を免れたが、大正年間に日出小学校の前身である鳴谷学舎が用地拡張を行う際、同時に廃されるはずであった。しかし当時町内在住の個人が買い取り、城内から同町の東仁王に移築され現在に至っている。二〇年程前までは住居として使用されていたようであるが、近年では土壁が剥がれ、屋根瓦の一部は崩れ落ち、隙間からは雑草が生い茂るといった惨状であり、現在でもこうした状態が続いている。

なお日出城では鬼門櫓以外にも裏門櫓という平家建ての櫓がかつて存在し、鬼門櫓同様個人が買い取って移築されていたが、現在すでに解体され、その部材が保管されているものの復元の予定はないようである。

次に襟江亭であるが、これは日出藩三代藩主木下俊長が建設した御茶屋のことを指す。御茶屋とは大名当主の領内巡視時の居所として、また参勤交代における宿舎や待機所などに利用された出張所的屋敷・小城郭のことである。近世では古くは徳川家康の関東入国と同時に御殿や御茶屋などと称する恒常的な宿泊施設として建てられており、武家諸法度制定以後も所謂「一

「一城令」には該当しない特例の支城的施設として全国の大名領国内に設けられ、中には堀や塙をもった城郭構えのものも存在した。しかし後に本陣が参勤交代における大名宿舎になると、次第に御茶屋の数は減少していったようである。

日出藩ではこの御茶屋を深江港（現在の大神地区深江漁港）に設け「襟江亭」と称し、主に深江港から参勤交代へ出発する際の待機所などとして用いられた。現在は鬼門櫓同様個人所有となっており、数寄屋書院をはじめ門や堀、石垣が現存する。

前述のように次第にその数が減少していったことと、出張所的屋敷・小城郭であるがゆえに現存することが珍しく、こども「数寄屋書院や門・堀・石垣がセットで完存する全国で唯一の現存御茶屋遺構」ということで極めて貴重な存在なのであるが、悲しいかな数寄屋書院は老朽化による崩壊が著しく、新聞記事掲載後にも取り壊される予定であった。ただし門や堀・石垣は比較的良好に残る。

二 保存に関する諸問題

新聞記事掲載から約一ヶ月後、ようやく現地を訪れ、鬼門櫓では所有者からお話を窺うことができた。

話を聞いてまず驚いたのは、この一ヶ月間に日出町や大分県の教育委員会はおろか大学や種々の研究機関または個人から一切保存に関する問い合わせがなかったということである。因みに新聞記事の取材で日出町の担当者は次のようにコメントしている。

「櫓は私有物で、町指定文化財でもないため関与できない」

何とも消極的かつ無関心なコメントであろうか。鬼門櫓も襟江亭も全国で唯一現存する建築遺構であることは先に述べた通りであるが、意外にも両者とも「文化財としてどこからも指定を受けていない」のである。

「私有物だから関与できない」というコメントにも理解に苦しむ。周知の通り全国各地には文化財指定を受けた個人所有の陶磁器類や刀剣類、古文書・記録類、絵画、邸宅等が数多く存在する。とりわけ寺社が所有する建造物や仏像などはその典型

的な例であるにもかかわらず、まったくおかしな話である。

これだけ新聞沙汰になりながら「私有物で町指定文化財外」ということを盾に関与を避けようとしている姿勢は不自然であるし、本来こうした事態が発生した場合、真っ先に対処するのが行政側の責務（住民サービス）と思うのだが、行政がこのような態度では本末転倒としか言いようがない。これでもし鬼門櫓や襟江亭がこのまま何の対処もされないまま朽ち果て崩壊し、「日本で唯一現存する」貴重な文化財が消え去るという最悪な結果を招いたとしても「町（県）指定の文化財ではないので我々には責任も関係ありません」と平然と主張するつもりなのであるうか。

所有者は出来る限り保存したいが、保存するにも諦めて取り壊すにも莫大な費用がかかり、もはや個人ではどうにも対処しきれない状況にある苦惱を語って下さった。

本来なら手を差しのべてくれる（そうであってほしいし、否そうでなければならぬはずである）日出町や大分県に陳情するのが筋であるが、その町や県が一ヶ月以上も「我関せず」といわんばかりにこの問題を放置している姿勢にもはや助けを乞うのは無意味と判断し、所有者の了解を得て筆者が所属する日本城郭史学会に現状報告と保存運動の提起を要望した。

幸いにも同会が緊急の委員会を開き、迅速な対応に尽力していただいた結果、文化庁長官宛に保存要望書を提出するまでに至った¹¹。その後文化庁担当者が来県、現状視察を行ったところ、鬼門櫓については外観に比べ内部はしっかりしていることから当面は現状維持が可能であることと、襟江亭の数寄屋書院については保存が難しい状態にあることから解体した上で、部材保存を検討する必要があるという見解を示したようである¹²。

なお同会は要望書を文化庁長官へ提出すると同時に当時の県知事・町長へも提出したようであるが、二年が経過した今日に至っても今だ県や町が具体的な対処に乗り出したという情報は聞かれない。

余談であるが、日本城郭史学会では例年全国各地の城郭を見学する旅行会を企画しており、一昨年は大分県の城郭が選ばれた。当然鬼門櫓も見学のコースに組込まれ、約五〇名の会員の方々に櫓の現状を見ていただいた。

櫓の惨状を目の当たりにした会員の方々は一体どう感じたであろうか。唯一現存する貴重な櫓遺構を見学できたというプラスの面も多分にあったかもしれない。しかしこれはあくまで社交辞令的な感想であって、実際は何故ここまで放置し、誰も保存の声を上げなかったのかというマイナスのイメージのほうが圧倒的に多かったのではないかと思う。(仮に筆者が県外から参加した会員であつたら間違いなくそう答えるであろう)

翌日、同会代表の西ヶ谷恭弘氏は移動の車中で参加者に一刻も早い保存運動を進めるべき旨を提案し、満場一致の拍手で賛同を得たが、同席した筆者は非常に複雑な心境でこの拍手を聞いた。全国の会員の方々が保存を真剣に考えて下さり大変嬉しく思う反面、本来この問題は地元の県民の手で解決せねばならないはずであるのに、その地元の県民は官民揃って無関心(恥)を全国の会員の前に晒してしまつたのだ。

そんなのは大袈裟な被害妄想だと言われればそれまでかもしれないが、この現実を筆者自身も含め県民は真摯に受け止めるべきではないかと思う。

その後は同会会員で評議委員でもある弥生町在住の小野英治氏を中心となつて保存に向けた運動を進めている状況であるが、ここでも心配事は尽きない。言うまでもなく鬼門櫓が存在した旧日出城は現在日出小学校敷地となつており、かつて櫓が存在した石垣はすでに改変され、元の位置への移築保存は不可能である。なお城跡には天守台石垣が良好に残つており、そこに移築してはという案もあるが、現地在小学校の敷地内に存在するということが問題になつてくる。なぜなら大阪の小学校乱入殺傷事件が発生して以来、学校への立ち入りが容易に出来ない状況になつており(隣の旧二ノ丸跡には中学校も存在する)、仮に城内に移築保存が実現しても自由な入城や見学が不可能になる恐れが想定されるからである。

鬼門櫓・裏門櫓・襟江亭の保存、復元、整備とともに町や県には一刻も早い対応策を講じるよう強く求める次第である。

三 県内の城郭建築遺構とその現状

小藩分立であった江戸時代の県内では規模は小さいものの各藩には城郭や陣屋が設けられ、中には今も現存する建築遺構が認められるが紙数の都合上今回はその主だった建築遺構について簡単に紹介する。

○府内城（大分市） 宗門櫓・人質櫓

○臼杵城（臼杵市） 畳櫓・卯寅口門脇櫓

○佐伯城（佐伯市） 三ノ丸櫓門

○森陣屋（玖珠町） 栖鳳楼・清水御門

○四日市陣屋（宇佐市） 陣屋門

※城壁などについては今回は割愛した

このうち府内城と臼杵城の諸櫓については一昨年の城郭史学会の見学会において特別公開され（意外にも一般公開されたのはこの時が初めてであったらしい）、貴重な内部構造を見ることができた。ただ残念でならないのはいずれの櫓も定期的な点検や清掃を行っている形跡が認められず、内部は塵や埃、虫の死骸などで床が覆われ、歩く度にそれらが舞い上がり、撮影した写真にまで写ってしまう始末であったことだ。

これらの櫓は文化財指定を受けているからそう頻繁に出入りすることが出来ないのかもしれないが、外側から見えないとはいえ保存状態がこの有様ではせっかく「指定」を受けた貴重な文化財の価値を下落させ、第二、第三の鬼門櫓になってしまう恐れがある。せめて定期的な点検、清掃に心掛け、年に一度もしくは数年に一度は一般公開できないものであろうか。関係機関には今一度考えてもらいたい。

こうした反面森陣屋の栖鳳楼が一昨年保存修復を完了し、期日限定ながら一般公開された。また樫江亭ではその後の新聞報

道によると、一昨年地元大神地区の住民有志が修復、保存に向け取り組んでいる様子が伝えられ、久々に明るい話題に接した。

おわりに

ここ数年来県内では文化財に関する多くの暗い話題が新聞紙上を躍った。例えば古代海部郡衙と推定される中安遺跡の破壊、古文書の大量散逸、別府市の亀川浜田温泉館の保存問題、JR東別府駅舎の保存問題、JR豊後森駅機関庫の保存問題などなど数えだしたらきりがないほどである。

何故ここまで文化財に関する負の話題が噴出、先行するのであろうか。ここまでくれば「大分県民は官民揃って文化財への関心が低い」と外部から指摘されても反論できまい。

確かに中には文化財を愛し、熱心に取り組んでいる方や団体もおられ、筆者自身もそういった方々を知っている。しかしそれとは相反する意見が存在するのも事実だ。次に挙げるのは、とある建築物の保存問題について述べられた一節である。この方は保存に異を唱え、こう述べる。要約すると、

「建物の中には、天井板は染みだらけで何ヶ所かは穴が開き板が外れている。もうこんな板壁や瓦葺きの建物は見苦しく何でも古いから良いとは思わない。この建物に限らず、古い建物は近代的な物にどしどし改築していくことを願う」⁽¹⁶⁾

とある。誤解の無いよう予め断っておくが、筆者はこの方を非難しているわけではない。「古いから良い」だから保存なのか」というこの方の疑問は至極当然であり、保存するならばただ単に「古いから」というだけでは理由にはなるまい。

保存の呼び掛けは各地で数多く聞かれ、これを否定するつもりはない。しかし肝心の理由やその後の活用についてまで言及しているであろうか。「なぜ保存の必要があるのか」という点にこそ焦点を当て、もっと議論する必要があるのではないかと考える。

このように文化財の保存については賛否両論である。しかし結局のところ我々の先祖から受け継がれてきた文化財が現存す

る以上、それらを保存・活用し、さらに後世に遺していくのが我々の使命（ただし、正当な理由付けと活用法の提示は必要）と思うのであるがいかかなものであろうか。

「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」が叫ばれる昨今、鬼門櫓や襟江亭をはじめとした文化財の「負の問題」は商業、工業、産業、経済といった「物の豊かさ」ばかりを優先し続けた（特に大分県では）結果、必然的に生じた弊害とも言うべき代償であらう。

「高速道路」も「箱モノ」も必要かもしれぬし、予算さえあればいくらでも何度でもそれは造り替えることが出来るだろう。しかし当たり前の話であるが、文化財は一度失われればいくら資金を用意しても元には戻らないのである。そしてその「当たり前の話」ですら我々は理解できておらず、こうした問題を生み、そして抱えているのである。これを機に文化財についてもっと真剣に考える時期（遅すぎるくらいだが）を迎えているのではないだろうか。

最後に改めてもう一度記しておきたい。

「鬼門櫓も襟江亭も日本全国で唯一日出町にしか現存しない建築遺構である」

今後の市町村合併により日出町は他の市町村とともに新「杵築市」となるようであるが、この合併に際し本件が闇に葬られるのではないかという不安を抱きつつも、まずは町や県の早急な対応を切望してやまない。

注

(1) 大分合同新聞朝刊 平成一四年七月一〇日 なおこれ以前にも地元TVニュースで取り上げられている。

(2) 大分合同新聞朝刊 平成一四年八月一八日

(3) 正保図では櫓だけでなく、石垣や堀まで鬼門を意識した構造が窺えるが現在では往時の石垣や堀は壊され、無関係の石垣が存在し、現地は小学校のプールの一部となっている。

(4) 図版参照

(5) 近世城郭において鬼門を意識するのは珍しいことではなく、全国的にも長（なが）（しん）（ま）櫓や北東隅櫓の名で存在し、櫓といった建造物以外でも縄張の中で鬼門を意識した構造を採用している城郭が多く見受けられる。

また城内には鬼門鎮護の神仏を祀ったり、城外に寺社を配した（江戸城における寛永寺など）例などから当時より既に城郭と信仰や慣習が深い関係にあったことを示唆する。

(6) 現状の櫓は十壁となつてゐるが、古写真などから元來は部板張りであつたことが確認され、これは外面の部板が全て削がれたことによる。

(7) 今回本稿では割愛したが、裏門櫓・鬼門櫓とも北野隆氏による復元実測図が『復元体系 日本の城8』ぎょうせい（一九九二）に所収されてゐるので参照されたい。

(8) 『国別城郭・陣屋・要害台場辞典』東京堂出版（二〇〇二）一五頁。

なお大分市鶴崎に存在した熊本藩鶴崎御茶屋もこの部類に属し、古絵図から水堀と堀で囲まれた城郭構えであつたことが窺えるが、現在は鶴崎小学校・鶴崎高校用地となつており、遺構は存在しない。

(9) 『野原文書』（速見郡史）所収）癸亥三月八日大神四良左衛門覚書に

「天和三癸亥三月八日、日出御城主木下右衛門大夫俊長公、江戸御參勤之節、深江御滞船被遊内、御用番合屋助之進殿を以、南大神村庄屋四良衛門に御尋遊に付、承傳候有増申上候覚書」

とあり、三代藩主俊長が參勤交代に出発のため深江（襟江亭であろう）で出港待ちをしている際に、地元の庄屋を呼び寄せ、大神氏について尋ねてゐる様子が記録されてゐる。

図版参照

別添要望書参照

(10) 『城郭だより』第四一号 日本城郭史学会（二〇〇三）

(11) 『城郭だより』第三九号 日本城郭史学会（二〇〇二）

(12) 栖鳳楼は天保二年（一八三一）、当時の森藩八代藩主久留島通嘉が建築した天守に相当する木造二階建ての建物である。久留島氏は

城持大名ではないため陣屋構えであつたが、幕末期に陣屋を城郭風に改築し、現在も残る雄大な石垣がそれを物語る。

(13) 大分合同新聞朝刊 平成一五年七月一六日 なお現在教寄屋書院には地元有志によつて雨除けの屋根が設置されている。（図版参照）

(14) 本文でも断つておいたが、この引用は当該文章の執筆者を非難するものではない。したがつて御本人の名譽のためにも当該文章に關

(15) する一切の情報の出処については、これを差し控えさせていただくと同時に、原文中における建造物の固有名詞は単に「建物」とい

う表記に改変させて頂いたことを重ねて御理解願いたい。

※本稿脱稿後、日出町は市町村合併から外れたようであるが、合併しようとしまいと鬼門櫓や襟江亭の問題は変わらない。また文化庁の「現状維持が可能」という判断に甘んじることのないよう今後の日出町、大分県の動向に注目したい。



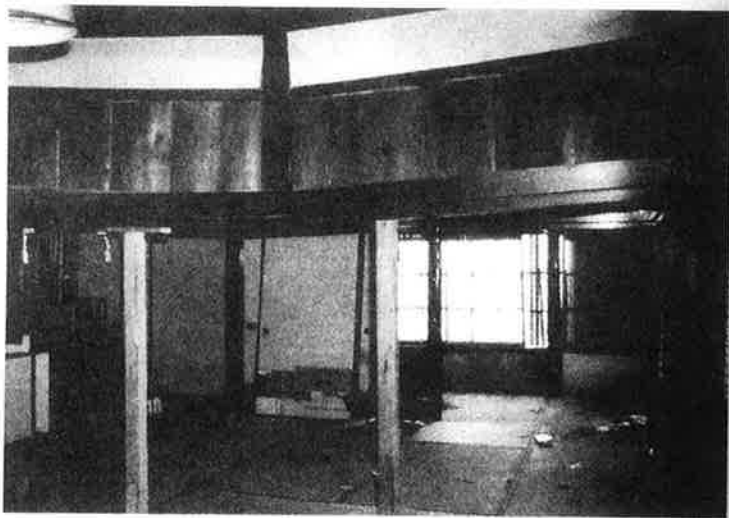
鬼門櫓の現況。鬼門である東北角（写真中央木の背後）を意図的に欠いた構造。（平成15年2月撮影）



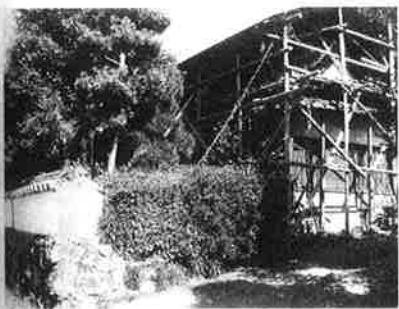
鬼門櫓の惨状（北西より）。壁土は剥がれ、屋根瓦の一部は崩落している。（平成15年2月撮影）



日出町深江の襟江亭。数奇屋書院・門・塀・石垣がセットで
実現する全国で唯一の御茶屋遺構。（平成15年2月撮影）



襟江亭数奇屋書院の内部。欄間部が屈曲し、応急の支柱
により辛うじて支えられている。（平成15年2月撮影）



襟江亭の現況。地元有志らによって
教奇屋書院には雨除けの屋根が設け
られる。(平成16年6月撮影)



日出城 鬼門櫓 (古写真)



府内城 宗門櫓 (城内より)



府内城 宗門櫓 (城外より)



府内城 人質櫓 (城内より)



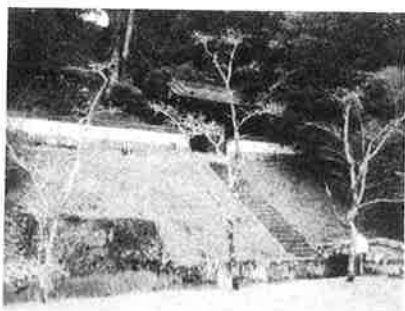
府内城 人質櫓 (城外より)



臼杵城 卯寅口門脇櫓



臼杵城 畳櫓



森陣屋 清水御門



森陣屋 栖鳳楼



四日市陣屋 陣屋門



佐伯城 三の丸櫓門

平成14年10月4日

要 望 書

文化庁長官
河合 隼雄 様



日本城郭史学会
代表 西ヶ谷 恭弘
東京都板橋区東坂下2-4-3-1102

大分県速見郡日出町に日出城跡があります。この日出城に関係する二カ所の遺構建築が、崩壊・取壊しの危機に直面しています。一カ所は同町東仁王の民家に移築されている鬼門櫓。もう一カ所は日出藩の御茶屋で、同町深江に残る襟江亭と呼ばれる数寄屋書院で

す。鬼門櫓は大正10年城跡の学校拡張建設により個人が買い取り移築し、16年前まで住宅として使用。今は管理費が高むため放置され、壁は剥げ落ち、本瓦葺屋根も崩れたままです。鬼門櫓は近世大名の居城では良(丑寅)櫓と名付けられ数多く存在しました(高崎城・名古屋城・大坂城・明石城・伊予松山城ほか)が、現在残存しているのは、全国で日出城鬼門櫓のみです。

日出城鬼門櫓の特長は、その形状にあります。鬼門である北東方向の角が角欠となつてい

るのです。すなわち方形平面の北東角がないのです。この角欠手法建築も全国に残存する櫓建築では唯一の存在です。御茶屋である襟江亭は、数寄屋書院と石垣・塀・門が完存するおそらく全国で御茶屋と呼ばれた施設で、唯一全ての建物がセットされたままの残る遺構です。個人所有で、持ち主は本年8月中に取り壊す予定でしたが、今日もかろうじて残っております。建造物すべてが350年前の建設と学術調査で判明しています。

以上のように鬼門櫓と日出藩御茶屋は緊急を要する保存対策が望まれます。鬼門櫓は城郭史上のみならず、建築史上、とりわけ建物と当時の信仰を知る特殊構造です。また御茶屋は建築史はもとより近世交通史、藩藩体制下の藩領出張陣屋の遺構として、完存するかけがえのない文化財です。文化庁におかれましては、関係機関と地元に対し、速やかなる保存対策の御指導をお願いする次第です。

以上

文化庁長官宛の要望書。(『城郭だより』第39号より)日付に注目。
筆者が城郭史学会へ報告してから約1ヶ月という迅速さである。